
真紅の薔薇の作り方

沖田リオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真紅の薔薇の作り方

【Nコード】

N0082Q

【作者名】

沖田リオ

【あらすじ】

【もしも不思議の国のアリスが自己中で多重人格な男だったら】
ひねくれた自己中な“男”アリスが、ウサギを追いかけたことで迷い込んだ不思議の国であった人たちの体験を通して、売り飛ばされそうになったり殺されそうになったりしてイライラしていきます。

(前書き)

不思議の国のアリスのパロディです

原作の素敵な世界観がかなりの確率で崩壊しています

主人公“男”です

一部残酷な描写があります

（冒頭）

お姉さんとのピクニックの間、アリスが木陰で本を読んでいると、

「大変です！ 大変です！ 時間に遅れてしまいます！！」

一匹のコートを着た珍しい白いウサギが、なにやら大慌てで目の前を通り過ぎていった。

そのウサギに何かを感じ取ったアリスは、ピクニックがてら持ってきたサバイバル道具を担ぎ上げ、後を追うことにした。

そのウサギは、大変だ大変だと叫びながら薄暗い洞穴の中へ入り込んでしまった。

追いかけるようか追いかけないか悩んだ末、追いかけることを選んだアリスもその洞穴の中へ入る。

懐中電灯で辺りを照らし、目を凝らしてウサギを探すが、ウサギの代わりに足元に大きな穴が開いていることに気が付いた。

降りるか降りないか考え、降りることに決めたアリスは、ひらひらのスカートから可愛さもへったくれもない迷彩柄の軍服に着替える。アリスには制服マニアな趣味があったのだ。

穴のフチにくいを打ちつけ、頑丈なロープを巻きつける。そしてロープを命綱代わりに腰に巻きつけ、穴の中に飛び込んだ。

そこでアリスは不思議な体験をする。

空間は宇宙のようにとこまでも広がっていて、色んなモノが浮いている。下半身が人間で、上半身が牛のケンタウロスのなり損ないのようなものや、頭とおしり、両方に顔が付いている気持ちが悪い馬のようなものや、ナスの馬がひくイチゴの馬車に、あつというまに狼に吹き飛ばされるレンガ造りの家。

四次元のようにだと、アリスは感じた。

「小さな扉と怪しいクッキー」

茶色い地面に降り立ったアリスは、ロープが限界ギリギリまで伸びきっていることに気づいた。仕方なく体に巻きつけていたロープを解いて、近くの木にくくりつける。

さくさくと土を踏んでしばらく歩くと、目の前に天を仰ぐほど高くて幅が広い壁が現れた。その壁の下のほうに、申し訳程度に小さい扉が付いている。どうやら、この扉を潜らないといけないようだ。アリスは悩む。中指程度の小さい扉に、175cmもある男の体が入るわけがない。首をひねって立ち往生していると、

「こゝんにちは〜」

いきなり肩に手を置かれた。振り向くと、黒いマントをすっぽり被った怪しい行商人がにっこり笑っていた。

曲者か。アリスは後ろ手にサバイバルナイフを握り締める。

「お兄さんは、もしかしてそちらの扉を通りたいんですか？」

「そうですね」

「それでしたら、こちらをお使い下さい」

行商人は下げていたかごから一枚のクッキーを取り出した。

「ザ・チイサクナルツキーです」

随分とまあ、幼児的なネーミングセンスだとアリスは鼻白む。

「こちらを食べていただく〜、身体がみるみる小さくなり〜そちらの扉を通れるようになります〜」

「副作用は？」

「ありません〜」

「過去の使用例は何件ある？」

「数十件あります〜」

「事故事件の件数はいくらある」

「ありません〜」

さすがアリス、ぬかりなし。

「小さくなって通り抜けたら、どうやって大きくなればいいんだ？」

「それには〜こちらの『ザ・オオキクナルツキー』を食べていただければ〜、元の大きさに戻ります〜」

「へえ」

こっちもこっちで稚拙なネーミングセンスだ。

とりあえず購入することに決めたアリスは、財布を取り出す。

「二枚セット、いくらで全部売ってくれる？」

「代金は特に頂きません〜。それと〜、こちらのクッキーはお一人様ワンセットしかお売りできません〜」

「へえ、ならワンセットくれ」

「まいどあり〜」

キレイにラッピングされたクッキーを受け取ると、アリスはそれをブーツの中にした。

「あれ〜？ お食べにならないんですか〜？」

不思議そうに聞いてくる行商人に答えず、アリスは行商人の手に握られている『ザ・チイサクナルツキー』を奪う。
そして間髪いれず行商人の口に突っ込んだ。

「んぐっ!？」

反射的に吐き出そうとする行商人の喉奥にまで腕を突っ込み、有無を言わず嘔下させる。

「がっ………がはっ」

むせ返る行商人の身体が、みるみる小さくなっていく。最終的には小指ほどまで小さくなった。

そんな行商人をつまみ上げ、小さくなった口元に『ザ・オオキクナルツキー』の欠片を差し出すと、ぺろっと舌を出して行商人は欠片を食べた。

しばらくして、ポンツとワインのコルクが抜けるような音とともに、行商人の身体は元の大きさに戻った。

(本物なんだな)

アリスはこのクッキーが本当に害がないか、目の前の人間で実験してみたのだ。

しかも、この実験で行商人の身に何かあっても助ける気は一切ないという無慈悲な考えのもとで。

アリスは、自分さえ無事ならあとはどうでもいいのだ。

行商人は地面にぺたんと座り込み、荒い息を繰り返す。それを尻目に、アリスは足を振り上げる。

ガンツ!!

壁を蹴った。

安っぽいその音で、蹴り倒せると踏んだ。

一心不乱に壁を蹴り続けると、ミシミシ木の板がきしむ音が聞こえ始める。

手ごたえを感じたアリスは、特大サイズのかなづちで、とどめを刺した。

バゴオン！ ガッターン！！

壁は向こう側に倒れ、粉塵をあげた。

買いはしたものの怪しげなクッキーを食べる気などさらさらなかったアリスは、最初から強行突破するつもりだったのだ。そこに行商人が現れたので、なんとなく遊んでみようと会話を始めた。

ギィギィ音を上げるベニヤ板の壁を踏みながら、先に進む。

く好色家のお茶会く

広い円形状に広場の中央に置かれたテーブルに、おいしそうなお茶が置かれている。

談笑しながらそれを食すのは、もふもふと可愛らしいウサギに、大きなシルクハットを被った若い男。

こいつらから何か有益な情報が得られそうか否か、検分する。
収穫、ナシ。

断定した。すたすたと横を通り過ぎようとする、帽子を被った男に声をかけられた。

「やあレディ。本日はどこへお出かけで？」

「誰がレディだ。節穴め」

「ふっ……これは気の強そうなお嬢さんだ。楽しめそうだよ」

手の甲にキスを落とされ、ぶわっと鳥肌が立った。

男に対してなにをするんだこの変態はっ……！！

「なにをする変態！！」

慌てて手を奪い返し、服のすそでゴシゴシ拭う。

「なにをするって、欧米ではおなじみの紳士の挨拶さ。君だって受けたことがあるだろう？」

「家族以外の男から受けたことはないな」

「そうなんだ。じゃあ君からレディたちにキスをしたことは？」

「山ほどあるな」

「そう……。なんだか妬けるね。こんなかわいい唇が安売りにされているなんて」

なにがかわいい唇だ。男に何を言うんだ。しかも本当に残念そうな顔をするから気味が悪い。

とつとと退散するか。背を向けると、後ろから腰に腕を回された。

「ひいっ」

「まあ、そう逃げないで。一緒にお茶をたしなもう」

「たしなむか！ 離せっ！ 気持ち悪いっ！」

「まあまあ、あまり暴言は吐かないの。キレイなお顔が台無しじゃないか」

「男にキレイって言われたって嬉しくねーよ。変態」

「……っはは、おいたが過ぎるね、このネコちゃんは。ちよっとお仕置きが必要かな」

お仕置き？

男がパチンと指を鳴らすと、空に暗雲がたちこめる。あちこちで雷鳴がとどろいたかと思うと、

ドドオーツンツ！

アリスは感電し、気を失った。

目が覚めると、アリスは席にしていた。

目の前には、おいしそうな紅茶とお茶菓子が並ぶ。どうやら場所は変わっていないようだ。

「お目覚めかなレディ？」

正面で紅茶を口に運ぶ男が笑う。

「手荒な真似をしてごめんね。でもどうしても君とお茶がしたくて……」

殊勝な態度で謝られ誘われ、しょうがなくお茶を楽しむことにした。

「ああ、そつだ。君が気絶している間、勝手ながら着替えてもらったよ」

「え」

はっと自分が身につけている衣類を見ると、サバイバル用の軍服は学生が着るような黒のブレザーにいつの間にか変わっていた。し

かもシルバーフレームのモノクルまで装備している。

「いやあ、お似合いだよ。惚れ惚れしちゃうね。それにしても君のかばんには色々入っているんだね。チェインソーなんて何に使うんだい？」

「漁ったんですか？」

「少しばかりね。けれどなにも盗ってはいないから安心して」
「……………」

人の荷物を勝手に漁る時点で安心できるか。興がそがれたアリスは立ち上がるうとするが、上から強い力で肩を押さえつけられた。仰ぐと、屈強な男が上からアリスの肩を押さえつけていた。その上、喉元にナイフまで当てられる。

「ああ、すまないね。3月ウサギは短気なんだ。僕がののしられるとすぐに怒ってしまう」

「!?!」

これがあの、先ほどまでお菓子を齧ってほよほよしていた3月ウサギなのかと、一瞬疑うが、頭に付いた白いうさみみに納得する。アリスは、一部合ってれば全部合っていると見る子だった。

「そんなことはどーでもいいんだけどさ、さっさと帰してほしいんですけど」

「それは断るね」

「はあ？」

なんで断るんだ。男は子細げに目を細める。

「君を、気に入ったんだ。連れて帰って僕の愛玩動物にするよ。嬉

しいでしょ?」

愛玩動物つて、ペットつてことか。
そんなこと誰が受けるかと鼻で笑う。

「嬉しいわけないし、俺のほうがお断りするね　　ッ」

吐き捨てた直後、喉元にあつたナイフが更に食い込んだ。

「言つたでしょう?　僕がののしられると怒るんだつて。大人しく
言いなりになつて?」

にっこりと、有無を言わさぬ口調で男は告げる。
押しつけられると反発したくなるのがアリスだ。

「そんなんで大人しくなつてるようなタマだったら、今頃こんなに
暴れてないだろ」

「おや、言うねえ。でも僕にとっては大歓迎。反抗する男の子つて、
屈服させる楽しみがあるじゃない?　ねえウサギくん」

「イエス・マイロード」

どこかで聞いたセリフだと思つたらそうだ、ここはイギリスだ。
まあそんな時事ネタは置いて、なんとかここから脱出しな
ければ。そのためにはこの屈強な男を退治しなければいけない。確か
カバンの中に色々武器が入っていたはずだ。その中から適当な
ものを選んでそれなりの使い方をすれば、このマツチウサギを仕留
められるかもしれない。

カバンはどこだと辺りを見渡すが、どこにも落ちていなかった。
落ちていないということは……。

地面ではなく目線の高さでカバンを探すと、マツチウサギの腕

の中にすっぽり納まるサバイバルカバンを見つけた。
返してくれそうに、ない。

「ああ、言い忘れていた。ウサギくんにはあまり逆らわないほうがいいよ。あと怒らせるのも得策じゃないね」

「何故？」

「……単語だけで返されると、悲しいものがあるね。ウサギくんは、人を殺すことに対して抵抗が無いんだ。イライラしたからつい……なんて理由で手をかけたこともある」

「は？」

男は紅茶に砂糖をいれ、ティースプーンでゆっくりとかき回す。

傍目からは優男にしか見えないこの男は今、ウサギは人殺しを厭わないと、やけに恐ろしいことを言った。

そんなことを言えるのだから当然、この男もその現場を見てきたのだろう。

ウサギが、人を殺す現場を。

ヒトゴロシ。

ツウ……と背筋に冷や汗が流れる。

「……なあ、あんたらの職業って、なんなの？」

「僕らかい？ そうだねえ……、分かりやすく言うと“セールス”かな？」

「分かりにくく言うത്？」

「詐欺師」

男はまたにつこりと笑う。

しかし、そこに黒いものが混じるのを、アリスは見逃さなかった。

詐欺師って、犯罪者だよな。

「ああ、誤解しないでくれ。別に取引をした人間全員を殺しているわけじゃない。僕らはね、双方が気持ちよく取引できるように、あの“約束”をするんだ。公平な約束をね。守ればお互いの利益になるというのに、おバカな人間はそれを破ろうとするんだ。約束は、破ったら罰則がつき物だろう？ だから、約束を破ったクライアントだけ、制裁を下しているんだ。僕は別に悪くない。悪いのは約束を守らないクライアントのほうだ。だから怖がらなくてもいいよ」

そうは言うが、それを聞いて怖がらない子供がどこにいる。

「なあ、あんたらの商品って、なんなの？」

「知りたいかい？ ああ安心しておくれ、君を売りさばいたりはないから。さつきも言ったとおり、僕は君を気に入った。ずっと僕の側に置いておくから、どこぞの変態貴族に売られるんじゃないかって心配も要らないよ」

その後も男は商品の説明を続けるが、冒頭を聞いただけでアリスはこの男の商売が何なのか分かってしまった。

人身売買だ。

好色家が多いと言われているイギリス貴族に男娼を送りつけて、金を稼いでいるんだ。

(逃げないと)

ここでやつと身の危険を感じた。

でも、どうやって逃げればいい。下手に動くと後ろのウサギに殺されかねない。

狼狽がばれぬよう透き通ったストレートティーに角砂糖を投入し

て、かき混ぜる。

それを見て、いい案が想到した。

(ブーツは、うし、履いてる)

この変態紳士が靴にまで執着してくれなかったことに感謝だ。

「あのさ」

「ん？ どうしたの？」

「俺、あんたらにお茶淹れていい？」

「ああ、いいよ。またどうしたの。嬉しいことをしてくれるね」

許可を取って立ち上がり、ティーポットの側まで行く。さすがにウサギはアリスを止めようとしなかった。

ポットの中に茶葉を入れ、お湯を注ぐ。ここまではオツケー。あとはこのセリフを言うだけだ。

アリスはすうつと息を肺いっぱい吸い込む。てきとうな所を指差して、

「あつ！ あんなどころにおいしそうな美少年がつ！！」

「えっ、どこだい！ どこにいるんだい！？」

変態紳士とウサギの注意が逸れた隙に、ブーツの中から『ザ・チイサクナルツキー』を取り出し、粉末状にしてポットの中に撒く。粉が見えなくなるまで何度もかき回した。

「あれえ、いないなあ。ねえ、美少年が見当たらなかったよ？」

「もうどっか行ったんじゃないですか？」

ぶう、と頬を膨らませる変態紳士にさらりと答え、何食わぬ顔で

二つのカップに盛り済みの紅茶を注ぐ。

「はい、どうぞ」

「ありがとうございます」

「ウサギさんも」

「……………」

アリスが満面の笑みで渡したことに、幸いにも誰もつつこまなかつた。

二人とも警戒心の欠片も無く、紅茶を飲み干していく。

そして、

「んんっ!?!」

「……………!」

行商人と同じように、二人の身体はみるまに縮こまり、あっという間にマスコットサイズになった。

勝った。

ドヤ顔のアリスのブーツにしがみつき、小さくなった二人はなにやら抗議するが、声は小さすぎて聞こえないし、殴られても蹴られても、頑丈なブーツはびくともしなかった。

ざまあみろ。

「やっぱり最後は人間様の勝利なんだよ!」

いかにもなセリフを言い放ったアリスは、カバンを手に取り歩き始めた。

〈真紅の薔薇の作り方〉

『関係者以外立ち入り禁止』

バラの垣根が続く道を歩いていると、そう書かれた看板が門の前にぶら下がっていた。

門の横には衛兵が立っていたが、ずかずかと進もうとするまるつきり関係者でもなんでもないアリスを止めようとはせず、逆に頭を下げて見送ってくれた。

もしかして関係者というのは建前で、実は誰でも通すのか。だが、アリスの後から来た人間は、パスポートのようなものを見せてから入っている。無論、パスポートを持っていない輩は弾かれていた。

不思議には思ったが、結果的に自分は通れたのでよしとする。

しばらく歩くと、一気に視界が広がった。見慣れたイングリッシュユガーデンには、先ほど両側に並んでいたものと同じ白いバラの花が咲き乱れている。

不自然なのは、トランプの身体をした人たちが、一生懸命白いバラに赤いペンキを塗っていることだ。

「早く、早く塗り替えて下さい。もうすぐで女王様が来てしまいます」

白髪を後ろに流し、白いひげを生やして老眼鏡をかけた執事な出で立ちの老人が、あわあわとトランプ人間に命令を下す。

よく見ると、ガーデン内には黒い執事服にメガネやモノクルを装着した男たちがたくさんいた。

そこで得心する。アリスも今、似たような格好をしている。だから衛兵はアリスをこの執事たちと同じだと勘違いをして通してしまっただろう。

(変態紳士、ナイス)

脳裏に小さくなった変態紳士が200%美化されて映し出される。変態紳士をつっついて遊ぶ妄想を脳内で繰り広げていると、目の前に赤いペンキが入ったバケツと刷毛が差し出された。

「お前さんはまだ若いのう。ほいじゃあ、突っ立てないで手伝ってくれ」

老齡のトランプ人間はそれだけ言って、アリスにそれらを無理やり押し付けて去っていった。

イラツとした。ただ単にお前がやりたくなかったただけだろ。お前ただ休みたかったただけだろ。関係ない人間に仕事押し付けんな。

こめかみに青筋を走らせて悪態づくが、今のアリスとあのトランプ、裁判にかけたら敗訴するのは確実にアリスのほうだ。理由は、関係者じゃないのに勝手に入ってきたから。

イライラはするが、頼まれたらとりあえずやるのがアリス。みようみまねで白いバラを赤く染めていく。

べちやつ。

「うわ」

ペンキが服に付いた。

イラツとボルテージ5ポイント上昇。

ぼとつ。

「げ」

バラの花弁と花弁の間にペンキが入り込んだ。とれない。

イラツとボルテージ10ポイント上昇。

「あ、ごめんね」

隣のトランプ人間が持つ刷毛がアリスの手に付き、手の甲に赤いペンキが付く。

イラツとボルテージ15ポイント上昇。

ギスギスしすぎて刷毛を乱暴に扱ってしまい、バラの花を一つ、落としてしまった。

イラツ。

それをほかのトランプに咎められた。

イライラツ。

この場で生産したイライラと変態紳士に対するイライラが混ざり合い、爆発しそうになる。アリスは不規則に頬を痙攣させた。

そして、爆発の時がやってくる。

「ちょっと、なにをしている！ わたくしが来たんだからさっさと
跪け！！」

「ああ？」

いきなり響いた金切り声に、眉間にしわを寄せながら振り返る。

そこには、毒々しいほど赤いドレスを身にまとった、まるまると豚のように太る年季が入ったおばさんが立っていた。

ちよつと、化粧濃いよ。見てて痛いよ。

跪く気なんて皆無だったが、隣にいたトランプ人間に首根っこを捕まれ、強引にしゃがみこまされる。

「なあ、あのばばあ誰？」

「しいつ。静かにしてて。あの方はハートの女王様だよ。この国で

「一番えらいお方なんだ」

「へえ。あとさ、なんでバラの色替えなんかしてたわけ？」

「それはね、女王様は赤いバラがお好きなんだけど、間違っって白いバラを植えちゃったんだ。だからみんな一生懸命塗りなおしてたのいい？ もう黙るよ」

そこで本当にトランプ人間は黙り込んだ。

ちらりと上げた視線の先では、醜い贅肉を盛大に揺らしながらハートの女王が演説している。

「お前ら、もうすぐでわたくし主催のカードゲームが開催されるのに、どうしてまだ準備が終わっていないのだ？ あと少してチェス帝国のポーン卿や、チェッカーボード公国のドラフト伯爵が来てしまうではないか！ お前らはわたくしに恥をかかせたいのか！？」

そのまるっとした体型がまず恥ですよ、女王様。

「前回のボードゲーム大会では帽子屋の詐欺師にさんざん引っ掻き回されて、各国からの信頼も失い、大不況で終わらせたから、今回はなんとしても成功させるのだ！」

帽子屋の詐欺師、すぐに変態紳士だと分かった。

変態、ナイス。心の中でガッツポーズを決める。

一人だけ“跪く”ではなく“しゃがみこみ”、自分の話を聞かないで別の思考にとらわれているアリスを、年増の女王様は見逃さなかった。

つかつかと歩み寄られ、持っていた杖であごを上向かされる。

近くで見ると、女王様の顔はぶよぶよに熟しすぎた桃みたいだ。べろんべろんのずるずる。たるんだ肉からは悪臭さえ漂う気がした。

「お前、見ない顔だな。新入りか？」

「ああ、まあ」

「ッ、新入りの分際でなんだその口の聞き方は！！」

いきなり頬を張られる。鈍い殴打音が明るい緑の庭園に響き渡った。

じんじんと、ぶたれた頬が鈍く痛む。

アリスの目が据わり始める。

「なんだその目は。わたくしに喧嘩を売ってるのか！？ わたくしを誰だと思っている！！ 普段ならば謁見もかなわぬ地位にいる人間に、雇われの身で齒向かおうというのか！！」

今度は杖の先でみぞおちを圧迫される、心臓に影響は無かったが、骨がゴリゴリと音を立てて痛かった。

何で、こんな仕打ちを受けなければいけないんだ。

不条理だ。

全く反省の色が見えないアリスに、女王様はまた杖を振り上げたが、その視線は別なものを捕らえた。

アリスを通り過ぎ、アリスが零したバラの花を拾い上げる。

「わたくしのっ……わたくしの大切なバラの花が……っ誰だ！ わたくしの大切なバラの花を無残に捨てたやつは！！」

耳元で喚かないで欲しい。鼓膜が破けてしまいそうな高音は苦手だ。

『はい』と軽く返事をすると、女王様の顔が真っ赤になった。般若だ。そこもまた気に障る。

アリスの怒りのボルテージは、もう少しで破裂しそうだった。

「またお前か！ つくづくわたくしの神経を逆なでしおって！！
ただではおかぬ！ 斬首だ、斬首刑に処してやる！！」

怒りに任せて、女王様はバラの花をアリスの顔に投げつけた。
避けもせず露骨にそれを受けたアリスの顔に、べつとりと赤いペンキが付着する。

ブチッ

怒りのリミッターが、振り切れた。

弾かれたように立ち上がり、女王の杖を奪って横顔を殴る。

「うわっ！！」

女王は避けようとしたが避けきれず、見事に攻撃を食らった。
周りでざわめきが起こる。

しかし、助けに来るものは誰もいなかった。

「なっ……なにをしている！？ さっさとこの無礼な男を
ひつとらえよ！！」

女王がいくらそう叫んでも、アクションを起こす家臣は誰一人いなかった。

そのことに景気付いたアリスは、ショックで動けない女王の目に杖を突き立てる。

ブジュ……と眼球がつぶれる生々しい水音が、アリス以外の人間を凍りつかせた。

「ひいっ」

女王が背を向け、逃げようとする。その長いスカートのを踏んでやると、勢いづいた女王の身体は前のめりになる。布越しても形が分かるほど突き出した尻を、思いつき蹴ってやった。

前傾姿勢で倒れた人間は、すぐには起き上がれない。だからアリスは女王に跨り、前髪をつかんで上向かせ、潰れた目にもう一度杖を、今度は眼底が破け脳に達するほど強く突き立てた。

「ぎゃあああああああ」

醜い。醜悪な豚の鳴き声。うるさくて、聞きたくなくて。女王の身体を仰向けにしたアリスは片足で首を踏みつけ、もう片方の足であごや頬骨を蹴り続ける。頬への狙いが逸れて靴先が鼻へと向かい、ボキユボキユ……と骨をきしませる音がして、向こう側に折れた。

目、鼻、口……あらゆる肉穴から赤い液体と、グジュグジュした黄色くて粘っこい液体が溢れ出す。

醜い、年老いた肉ダルマ。

「ひいつ……、も……許して……くれえ……」
「断るね」

あえかな声で命だけはと懇願されるが、アリスはあっさり一蹴した。

「な……何故だ、何故命令に従わない……？ わたくしを……誰だと思っている」

「ハートの国の女王様？」

「そうだ……。そのとおりだ！ だから……国民であるなら……。わたくしに逆らうなど、こっ……国家反逆罪だ！ 死刑は免れないぞ！」

「残念でしたね。俺はこの国の国民じゃないんで、あなたに従う理由もありませんし、反逆罪で捕らえることもできないんですよ。まあ、今回限り敬語だけは使ってやりますよ」

ちようど目の前にあった、女王の眼に刺さる杖を乱暴に揺さぶると、女王は低く大きく唸って更に血を溢れさせた。

ふと横を見ると、赤く塗りかけの白いバラが目に入った。

………妙案が浮かぶ。

「なあ、女王様。このバラね、家臣たちがあんなのために一生懸命塗り替えてたんだよ？ 白から赤に。あなたが赤いバラだあーいきだっというから」

女王は、口を動かして何かを言おうとしているが、残念ながらゴボゴボと水の中の気泡が潰れる音しか聞こえなかった。

「あんだ、赤いバラ好きなんだろ？ 赤いバラってさ、赤ければ赤いほど、キレイでいいよな。赤くて赤くてキレイな花、咲かせてみたくない？」

一応疑問形にはしたが、答えを聞く気などさらさら無い。アリスは背負っていたカバンを開き、中を探る。

チエーンソーを、取り出した。

物騒なそれを取り出した途端、周囲の空気がガラリと、本能的な恐怖が漂うもの変わった。

みんな、アリスがこれから何をするのか、分かったのだろう。それで合っている。

「ペンキなんかよりさらさらで、ペンキなんかよりもつと赤くてキレイなもの。それで染めちゃったほうが話し早くない？」

バッテリー式のチェンソーの電源を入れると、ギューンギューンと長く鋭い刃が高速回転する。

正常な思考が空の彼方へ飛んでいった、ギラつくアリスの瞳に、それはとても美しいものに映った。

この銀色の刃が真紅に染まるのだと思うと………背筋がぞくぞくする。

躊躇いなど感じさせない滑らかな手つきで、身体を上下二つに割るために、心臓を分断できる位置に刃をセットする。

それを見て、さすがに女王は慄いた。

(片目、残しておいて正解だったな)

音だけでも恐怖は与えられるが、実際に自らの身体が裂かれるその瞬間を見たほうが、恐怖は倍増するから。

頬を殴られ、みぞおちを刺され。それだけではない、変態紳士から受けたセクハラとか、マッチョウサギに押さえつけられたりとか、感じた苛つきが今ここで発散されている。

何故、このばあをここまでいたぶるのか。

理由は一つ。

八つ当たりだ。

断末魔が聞きたくて、でも早く殺してしまいたくて、アリスは勢いつけてチェンソーを肉に埋めた。

………。

吹き上がる、血液。
鳴り響く、骨折音。
響き渡る、悲鳴。

感じるのは、快感。

アリスは、悦楽の余韻に、ずっと浸っていた……。

「はい。これでおしまい」

パタンと、姉が古い表紙の本を閉じる。閉じた瞬間、ぱふっとほこりが舞い上がった。

「えー、なにそのオチ。面白くない」

ずっと物語を聞いていた有栖は文句を垂れた。

「まあまあ、そう怒らないのアリスちゃん。かわいいお顔が台無しよ?」

「男に向けてかわいいとか。姉さんなんか変態紳士みたい」

有栖は物語の主人公のアリスと同じく、可愛らしい名前をしていてもれっきとした男だった。

「そうよ。だってなんだか共感したんだもの。アリスちゃんだった

らレディって呼びたくなるし、ずっと手元においておきたいし。きっと、高く売れるでしょうねえ〜」

「弟のことそんなふうに言うの止めてよ」

しかも陶然として言っているのだから、現実味があつて恐ろしい。

「大体さ、なんでそんなそら恐ろしい本が家にあるわけ？ 普通の不思議の国のやつはないのに」

「ああ、これね。これはねアリスちゃん。あなたのひいおじいさんの体験談をおじいさんがまとめたものなのよ。ちなみに、ひいおじいさんの名前も『有栖』よ」
「なんだそれ……………」

こんな非・現実的な実際に体験した人がいるというのか。しかも家内に。

……………到底信じられないな。

「さあ、これで寝れるかしら？」

「寝る寝ない以前に、勝手に俺の部屋に入ってきて本読み始めたの姉さんじゃん」

「あら、そうかしら？ だってアリスちゃん、毎晩のように私の部屋に入ってきて、ご本読んで〜ってねだつてきてたじゃない」

「いつの話？」

それはまだアリスが未就学児のころの話ではなかるうか。

お互いいい年なのに、つくづく、弟離れできてない姉だと思う。甘やかすのが好きだとしても、立派に 可愛い顔だとは自覚しているけど 育った弟より、親戚の女の子とかを構えばいいのに、とも思う。

それにだ、有栖がまだ本を読んでもらいたい年頃だったとして、

就寝前にチェンソーで人をぶった切る話をするものだろうか。逆に怖くて眠れないだろう。

「それじゃあアリスちゃん、おやすみなさい。なんかあったら姉さんの部屋に来て良いからね」

「ああ、うん」

ないとは思うが、一応返事だけはしておく。

姉は部屋を出て行った。しかし、極悪男アリスの本だけは置いていった。

(読めって言うのかな)

手慰みに引き寄せ、裏表紙を持って引き上げる。

パリりと、何かが本の中から落っこちた。

(紙・・・・・・・・?)

かなり黄ばんだ、手のひらサイズの長方形の紙だ。指を伸ばして拾う。質感から、ブロマイド写真だと分かった。

誰が写っているのだろう。ひっくり返して 驚愕した。

「俺・・・・・・・・?」

年季が入ってせいがかすれて見えない部分もあるが、そこに写るのは誰がどう見ても『有栖』だった。

苗字部分は消えて読めなかったが、下方の白いフチに書かれた名前は、

『Alice』

(アリス………)

もしかしたら、姉さんが言っていたひいおじいさんって、この人か？ それにしても、似すぎている。

だからって何かが起こるわけでもないし、気にすること無いか。

そう決めた有栖は写真を元の場所に戻し、ベッドにもぐった。

その日、見知らぬ人にチェンソーで殺されかけた夢を見たのは、また別の話である。

END

(後書き)

ここまで読んでください、ありがとうございます。沖田リオです。久々に短編を書いてみたものの、なんだか、変り種になってしまいました。

パロディのはずなのに、パロディのはずなのに。なんで最終的にグロくなるんだろう……。

連載モノ以外はグロいか暗いかしか書いてないような気がします。

この話、元はコメディにしようと思んでいたことは秘密にしておきます(笑)

重ねて、最後の最後まで読んでください、ありがとうございます。た。

またあなた様のお目にかかれればいいなあと、切に願っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0082q/>

真紅の薔薇の作り方

2011年1月11日20時48分発行